

Re public of Madagascar

EARTH GALLERY Vol. 128 [マダガスカル共和国]

地球ギャラリー
写真・堀内孝
写真家

ムルンダヴァ郊外にある「バオバブ街道」の朝。
樹高25mを超えるグランディエリ・バオバブが朝日を受けて、赤く染まる。

バオバブの森を未来へつなげる

マダガスカル人の主食は米。水田耕作が広がる中、バオバブの根腐れが心配される。



バオバブ街道周辺ではザー・バオバブも見られる。



3月、フニイ・バオバブは鮮やかな黄色い花をつける。



バオバブの果実。白い果肉は、ほんのりと甘酸っぱい。



バオバブ街道のそばで、お土産用の木工品を作る女性たち。現金収入の増加に役立っている。



地元の人々が願い事をするために訪れるというキリンディ村の「聖なるバオバブ」。



植林用のバオバブの苗木。この地域に自生するグランディディエリ、ザー、フニイの3種がある。



バオバブの樹皮を担ぐ男性。



樹皮はロープや屋根材として使われる。

雨季が近づくと、住民は作物を植えるためバオバブの森に火を放つ。黒焦げになったバオバブが点々と残る。



アフリカ大陸の東、インド洋に浮かぶマダガスカル島は、キツネザルやカナボウノキなど動植物が独自の進化を遂げた島として知られる。なかでも近年、わたしが集中して撮影しているのがバオバブだ。この木は、アフリカ大陸に1種、オーストラリア大陸に1〜2種しかないのに対し、マダガスカル島には8種あるとされる。わたしはその多様な姿に興味を持ったのだ。

バオバブが生えているのは、島の北西部から南部にかけてのおもに乾燥した地帯だ。エメラルドグリーン色の海が広がる北部のデイエゴ湾。そこに丁字型の枝を広げて立つのは、スアレゼンシス・バオバブだ。海とバオバブのコントラストがとても新鮮である。北部にはこのほかにも、マダガスカリエンシスやペリエリ、ブジイなどのバオバブが分布する。北西部の都市マハザンガでは、アフリカ大陸原産のデイギター・バオバブの大木も見られた。

南西部の町ムルンベ郊外には、ツイタカクイケと呼ばれるグランディエリエリ・バオバブが立っていた。現地語で「向こう側の音が聞こえない」という意味だそうで、幹回りは27メートルを超え、島内一の大きさだ。この木には精霊が宿ると信じられており、住民は願いごとがあるとこの木に願をかけ、叶うとウシを捧げた。残念ながら昨年、雷に打たれて幹が倒れたが、こうした巨木はほかにもありそうだ。

南西部ではずんぐりとした樽型のバオバ

ブも見られた。同じグランディエリエリだが、ウシの餌にするために枝を切り取った結果、そのような形になったという。この地域は乾燥していて土壌の塩分が強く、ウシの牧草が十分に育たないため、バオバブの枝や葉を餌として与えているのだ。

さらに乾燥した南部にはフニイ・バオバブが生えていた。樹高は10メートルほどだが、樹齢千年以上の木もある。水不足が深刻なこの地域では、人々はバオバブの幹をくり抜いて雨水をため、貯水タンクとして利用していた。同地域で出合ったザイ・バオバブの巨木は幹回りが22メートルを超え、中の空洞には大蛇が棲むという。

そしてマダガスカルで最も有名なものが、中西部の街ムルンダヴァ郊外にある「バオバブ街道」だ。樹高25メートルを超えるグランディエリエリが立ち並ぶ景観は、圧倒的な迫力だ。

現在は禁止されているが、地元の人々は昔からバオバブの樹皮を剥ぎ、それを使って屋根を葺いたり、ロープにしたりしてきた。果実は、子どもたちのおやつになってきた。割ると白い果肉があり、甘酸っぱくておいしいのだ。水に溶かして砂糖を加え、ジュースにもしている。昔は実を搾り、油をとっていた。殻は食器としても使った。樹皮はカルシウムが豊富で、煎じて薬としても使われる。バオバブは、人々にとってとても有用な木なのだ。

ところが今、人口が急激に増え、耕作地

を確保するためにバオバブの森が大規模に焼き払われている。水田耕作の広がりによって根腐れを起こし、倒れるバオバブも多い。さらに近年の気候変動でサイクロンが巨大化し、猛烈な風雨でバオバブが倒れる例も後を絶たない。今では国際自然保護連合の絶滅危惧種に登録されている種もあるという。

そのためバオバブ街道周辺では、地元のNGOであるフアナンビがバオバブの保全活動を行っている。保護地域は320ヘクタールで、そこに327本のバオバブが残る。それらを保護するとともに、世界中からやってくる観光客にバオバブの苗木を買ってもらい、それを植林する。今まで1300本を植えたが、最も多く植林したのが日本人だという。また地元民が作ったバオバブの木工品も販売している。森を焼いて換金作物を育てなくても、現金収入を得られるようにするためのだ。

マダガスカル語でバオバブは「レナラ」と呼ばれる。「森の母」という意味だ。このまま放置すれば、この貴重な木がなくなってしまう。バオバブ街道以外でも、保全活動が急務となっている。

堀内孝(ほりうちたかし)

1963年宮城県生まれ。写真通信社を経て、フリーの写真家になる。90年よりアフリカのマダガスカルを訪れ、人々の暮らしや独自の進化を遂げた動植物取材。97年からは、東南アジアにもフィールドを広げ、少数民族の暮らしと手仕事を撮影している。著書に「マダガスカルへ写真と機材で行く」(港の人)、「マダガスカルのパオバブ」(福音館書店)、「青い海をかけるカヌー」(福音館書店)など。



NGOフアナンビは、バオバブ街道で住民とともに木製品の販売を行う(左)。また、そこから数十キロ離れた森で「キャンプ・アモレ」も運営しており、宿泊してバオバブやキツネザルを見ることが出来るほか、レストラン(中央)ではおいしい食事(右)も楽しめる。

